

幼稚園における夏季宿泊保育の意義： 領域「環境」・「健康」との関連からの考察

遠 藤 知 里

キーワード／幼児教育、保育内容、領域「環境」、領域「健康」、キャンプ

問題と目的

筆者は、(財)神奈川県ふれあい教育振興協会の協力により、神奈川県立足柄ふれあいの村（神奈川県南足柄市）で行われた2泊3日の宿泊保育を対象として、宿泊保育の効果について調査を行う機会を得た。ここでは、実践事例と調査結果を基に、幼稚園教育要領における領域「環境」および領域「健康」の観点から考察を加えることにより、効果的な宿泊保育のあり方を考える資料を提示することを目的とした報告を行う。

幼稚園や保育所では、主に年長児を対象として、「お泊り保育」と呼ばれる1泊から2泊程度の宿泊保育が広く行われている。宿泊保育は夏季に行われることが多く、目的に応じて園外の宿泊施設を利用して行われる場合と、園内で行われる場合がある。

青少年教育施設を利用して行われる宿泊保育は、園外保育のひとつの形態である。特に、自然体験を重視した宿泊保育では、森や河原のような広々とした戸外の空間でのびのびと遊んだり、自然に触れ生き物や水や火などに親しんだり、明暗や寒暖の差など昼夜の環境変化を体感したりといったことが重要な体験となる。また、生活体験としては、着替えや布団の上げ下ろしなど身の回りのことを自分で行ったり、親と離れて一晩を過ごしたりということが、子どもにとっては新鮮であろう。普段とは異なる環境の中に身を置くことで、豊かな体験を伴った生活を行うことが可能である。

自然の中での活動は、子どもの心身が解放される機会であると同時に、いつもと違う環境に身を置くというなじみのない状況に対する適応を経験する機会でもあり、子ども自身が自分のがんばりを認められる出来事が多く含まれる。普段できない体験をすることで子どもの成長が期待できるため、準備から実行に至るまでの大きな負担にもかかわらず、多くの園で園外での宿泊保育が行われている。

自然体験を重視した宿泊保育で達成しうる内容について、幼稚園教育要領における五領域との関連を見ると、領域「環境」および領域「健康」に、自然の中での活動に関わる記載がある。領域「環境」では、内容の取り扱いの中で「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」と述べられている。また、領域「健康」では、内容の取り扱いの中で「自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること」と述べられ

ている。これらのことは、園内環境の工夫によって日常の園生活の中でも行っている内容であるが、自然体験を中心とした宿泊保育では自然環境のもつ力を借りて、重点的にこれらの内容を扱うことができる。

また、多くの子どもたちにとって、親元を離れて一晩を過ごすことは初めての経験である。個人差はあるものの、ほぼ生活習慣の自立が確立している年長児では、宿泊保育は身の回りの整頓や着替えなどを自分ですること十分に時間をかけて取り組める機会でもある。幼児が自分の力でさまざまな活動に取り組むには、いつでも適切な援助が受けられる、あるいは周囲から自分の存在を認められ、受け入れられているという安心感のある環境が大切である。また、親元を離れての宿泊という初めての経験に挑戦して「できた」という達成感を得ることも、新しいことに挑戦する意欲の向上につながるであろう。こうしたことから、達成感や自信がわが子の自立心を高めるのではないかと、宿泊保育に期待する親も少なくないであろう。

しかし、宿泊保育で実際に行われている内容について、疑問を感じることもある。特に、活動を詰め込み過ぎのプログラムと、過剰な事前準備が気になる。たとえば、「普段できない体験を」という親や先生方の強い思いからか、たとえばスイカ割り、野外炊事、肝試し、キャンプファイヤー、花火などと、次から次へとやることが並び、自然の中で自由に遊ぶ時間が失われている。また、キャンプファイヤーは本来、仲間とともに炎を囲んで一日を振り返るものであるが、事前に練習してきた踊りや出し物の発表の場となっている。キャンプファイヤーでの音源使用は、音量の大きなスピーカーを必要とし、環境配慮の観点からも問題であろう。いずれも、宿泊保育で多くのことを体験させたい、子どもたちを楽しませたいという思いの表れなのだが、体験の量を追求することによって時間的な余裕が失われ、自由なあそびの中での自然とのふれあいや、子どもどうしのかかわり、子ども自身が主体的に組み立てる生活から、子どもを遠ざけているような気がしてならない。

幼稚園をはじめとした保育の場において広く行われている宿泊保育だが、その内容は園によって実に多様である。もちろん、それぞれの園で設定された目的に沿ってさまざまな実践があってもよい。しかし、自然体験を軸に宿泊保育を企画する場合、幼稚園教育要領に示されている内容との関連も視野にいれつつ、効果的なプログラムとするためにはいくつかの鍵となる要素があるものと思われる。

方 法

(1) プログラムの概要

平成22年7月に実施された、H幼稚園の宿泊保育を研究対象とした。H幼稚園は、関東の都市部にある幼稚園であり、「心豊かに、たくましく 1) 豊かな感性に裏付けられ、健やかな心と体を持った子ども、2) 自分の力で考え、行動できる積極的で粘り強い子ども、3) 生き生きとした個性を持ち、仲間を大切に、皆で力をあわせる喜びを知っている子ども」を教育目標として、自由保育を中心とした教育実践を行っている。

今回の宿泊保育は、神奈川県立足柄ふれあいの村にて2泊3日の日程で実施された。年長児83名が参加し、教職員（教員とバスの運転手）18名が指導に当たった。

宿泊保育のプログラムの概要を、表1に示した。

表1 研究対象とした宿泊保育のプログラム

	1日目	2日目	3日目
6:00		起床・洗面 散策（班ごとで） 朝食（食堂）	起床・洗面 散策（班ごとで） 朝食（食堂） 宿舎の清掃・片づけ
10:00		（バスで移動） 滝を見にいく 沢あそび 昼食（弁当） バスまで徒歩で移動 （バスで移動）	退村のつどい （バスで移動） 園に到着・解散
15:00	園集合		
16:00	園出発（バスで移動）		
17:00	入村のつどい 宿泊準備 林内の散策（班ごとで） ・ゲームウォーキング ・森のビンゴゲーム	林内の散策（班ごとで） ・ゲームウォーキング ・森のビンゴゲーム	
18:00	夕食（食堂）	夕食（食堂）	
19:00	入浴	キャンプファイヤー	
20:00	花火	入浴	
21:00	夜の散策（班ごとで） 就寝	就寝	

この宿泊保育のプログラムでは班ごとの活動が多く、自由な時間がたくさんあったために、自然に触れる機会が多くあったこと（写真1）が特徴としてあげられる。

一つの班は、7名から10名程度の子どもに教員1名が付くという構成で、班単位という少人数での行動を基本とすることにより、わずかな時間でも自然の中に出かけることが容易となり、子どもたちの思いに沿った活動の展開を可能としていた。



写真1 朝のひととき

朝食前、宿舎周辺の林の中を、子どもたちが先生と一緒に散歩していた。道を外れてせせらぎに下りると、先生は沢の水にそっと手をつけてみせる。見ていた子どもたちも、水の中へと手を伸ばす。

「・・・・つめたいねえ。」

「こおりみたいにつめたいねえ。」

子どもたちは口々につぶやきながら、小さなてのひらを流れに浸すのに夢中だ。先生がたちあがるまでじっと、水の冷たさや透明な輝きを楽しんでいた。

また、2泊3日の日程で、初日の午後集合して夕方から活動を開始し、最終日は午前中に活動を終えるという構成は、かかる時間を最短にしながらも夜と朝を2回ずつ経験できるという点で優れていた。二晩泊まると、着替えや入浴、寝床の準備や片付けなどといった基本的な身支度を二度体験できる。繰り返すというのは、生活というものを実感する上で重要な要素である。また、初日より二日目のほうが何事も当然スムーズにできるため、自然な流れの中で、どの子どもも「自分でうまくできた」という成就感を得られる仕掛けとなって

いるように感じられた。

(2) 対象者

宿泊保育に参加した子どもとその保護者計83組を調査の対象とした。そのうち、未記入部分のある回答などを無効として除外し、最終的に57件（69.9%）の回答を分析の対象とした。

(3) 調査内容

1) 自立心と協調性

自立心を「人に頼らず自分の力で解決しようとする能力」、協調性を「友だち関係を維持する能力」および「ルールを守る等の社会的能力」と操作的に定義し、(財)神奈川県ふれあい教育振興協会が独自に作成した自立心と協調性に関する調査項目を用いて、自立心と協調性に関する子ども自身の評価と保護者から見た評価についての調査を行った。

調査項目は、1)クラスで約束したことを守ることができますか、2)遊んだあとの道具を片付けることができますか、3)はじめての人でも大きな声であいさつができますか、4)先生のお話を静かに聴くことができますか、5)すべり台やぶらんこなど順番を守って遊べますか、6)お友だちが困っているときに助けることができますか、7)お友達とけんかをしてもすぐ仲直りができますか、8)荷物の整理やお着替えなど自分でできますか、9)朝眠くても自分で起きることができますか、10)ご飯をすききらいなしで食べることができますか、の10項目であり、自立心に対応する項目は3)、4)、8)、9)、10)、協調性に対応する項目は1)、2)、5)、6)、7)であった。

2) 子どもの様子

現職の保育士や野外活動指導者、研究者など有識者の意見を参考にして、(財)神奈川県ふれあい教育振興協会が独自に作成した調査項目を用いて調査を行った。調査項目は、1)自分の気持ちを言葉にして伝えることが多い、2)幼稚園での出来事をよく話す、3)自然(動植物等)のことに興味を持っている、4)自然の現象(星や花がきれい等)によく感動する、5)ゴミの分別や資源の節約など環境に興味がある、の5項目であった。

(4) 手続き

宿泊保育前と宿泊保育後に、上述の自立心、協調性、子どもの様子についての調査を実施した。調査時期は、宿泊保育前後それぞれ1週間の間であり、各家庭において宿泊保育に参加した子どもの保護者が調査用紙に回答を記入した。

自立心と協調性については、「よくできる」を4点、「できない」を1点として、4段階での評定を求めた。子どもの変化については、「よくあてはまる」を4点、「あてはまらない」を1点として、4段階での評定を求めた。なお、子ども自身の評価については、子どもの保護者が子どもに質問しその回答を聞きとり記入する方法を用いた。

結 果

(1) 自立心と協調性の变化

自立心と協調性の得点について、宿泊保育前後の平均の差を検討するためにt検定を行っ

た。表 2 に、子ども自身の評価と保護者の評価それぞれの平均と標準偏差および t 値を示した。

表 2 宿泊保育前後の自立心と協調性の変化

		宿泊保育前		宿泊保育後		t 値
		平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
子ども自身の評価	自立心	16.07	2.43	17.40	2.10	4.13 **
	協調性	17.09	2.47	17.56	1.91	1.33 n.s.
保護者の評価	自立心	14.77	2.22	16.44	1.75	6.15 **
	協調性	15.30	2.48	16.28	2.40	3.45 **

** p<.01

子ども自身の評価では、自立心の差について、宿泊保育前よりも宿泊保育後のほうが高い得点を示した ($t(56)=4.13$, $p<.01$)。また、保護者の評価では、自立心 ($t(56)=6.15$, $p<.01$)、協調性 ($t(56)=3.45$, $p<.01$) とともに、宿泊保育前よりも宿泊保育後のほうが高い得点を示した。

(2) 子どもの様子の変化

子どもの様子の得点について、宿泊保育前後の平均の差を検討するために t 検定を行った。表 3 に、保護者による評価のそれぞれの平均と標準偏差および t 値を示した。

表 3 宿泊保育前後の子どもの様子の変化（保護者による評価）

	宿泊保育前		宿泊保育後		t 値
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
自分の気持ちを言葉にして伝えることが多い	2.88	0.78	3.18	0.71	3.19 **
幼稚園での出来事をよく話す	2.91	0.89	3.21	0.77	2.29 *
自然(動植物等)のことに興味を持っている	3.26	0.74	3.33	0.58	0.63 n.s.
自然の現象(星や花がきれい等)によく感動する	3.23	0.73	3.37	0.59	1.53 n.s.
ゴミの分別や資源の節約等、環境に興味がある	2.72	0.90	2.98	0.69	2.22 *

** p<.01 * p<.05

保護者評価による子どもの様子の変化について、宿泊保育前よりも宿泊保育後のほうが高い得点を示したのは、「自分の気持ちを言葉にして伝えることが多い」($t(56)=3.19$, $p<.01$)、「幼稚園での出来事をよく話す」($t(56)=2.29$, $p<.05$)、「ゴミの分別や資源の節約等、環境に興味がある」($t(56)=2.22$, $p<.05$) の 3 項目であった。

考 察

幼児を対象としたキャンプの研究では一般に、幼児自身の自己評価を調査することは難し

く、保護者や指導者による評価を用いてその効果を検討することが多い。幼児自身による自己評価を用いた調査を行っている数少ない研究例のひとつである幼少年キャンプ研究会(2008)では、年長児を対象とした4泊5日のキャンプで幼児の自立心はキャンプ後に低下したと報告されており、本研究の結果とは異なる。

調査項目の内容が異なること、キャンプの内容が異なることなど、相違点が多くあるため一概には言えないが、幼稚園が実施する宿泊保育では、ひとりひとりの幼児の日常の様子を熟知している教師がかかわることにより、幼児自身が主観的に「人に頼らず自分の力で解決できた」と感じられるような出来事を多く体験できる環境の構成が可能であり、それが自立心の向上をもたらす鍵となったものと考えられる。

幼稚園教育要領では、領域「健康」における内容の取り扱い(5)において、生活習慣の形成を通して幼児の自立心を育てることの重要性が指摘されている。解説で述べられているように、幼稚園とは幼児が家庭生活の中で獲得してきた生活上の習慣を、教師や他の幼児と共に生活する中で社会的にも広がりのあるものとして再構成し、身につけていく場であるが、宿泊保育では家庭を離れて24時間まるごとの生活を行うという、日常とは異なる環境が有効に作用するものと考えられる。また、基本的な生活習慣の形成に当たっては、幼児が一つ一つの生活行動の意味を確認し、必要感をもって行うようにすることが大切であるが、生活に必要な行動を真に身につけるためには、自立心とともに自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性が育てられなければならないと説明されている。今回、研究の対象とした幼稚園の宿泊保育では、小グループでの生活により、教師によるひとりひとりの生活経験に配慮したきめ細かな援助、班単位での効率的な行動による時間的余裕の創出などにより、幼児自身が主観的に「人に頼らず自分の力で解決できた」と感じられるような出来事を多く体験できたため、主観的な自立心が向上したものと理解することができる。

協調性については、子ども自身の自己評価では宿泊保育の前後での変化は認められなかった。一方、保護者による評価では、自立心、協調性ともに宿泊保育後の評価が高くなっていた。このことについて、保護者による評価を用いて3泊4日のキャンプを含む継続型幼児キャンプの効果を明らかにした伊原(2008)は、協調性に関連するものとして「コミュニケーション」がキャンプ後に向上することを示しており、本研究と類似の結果が得られている。幼児が自己の能力について過大に評価する傾向はよく知られているが、今回の結果では、協調性に関しては保護者による評価のほうが幼児自身の評価を上回っている。保護者による評価のほうが高くなる理由として、宿泊保育の効果に対する期待感による影響のほか、子どもと離れる体験による保護者自身の変化が考えられる。飯田らによる報告(飯田ら, 1978; 飯田ら, 1979)では、実際にキャンプを体験する幼児だけではなく、子どもと離れることによる母親自身の不安の存在を明らかにしており、その不安を乗り越える体験が母親自身に変化をもたらすことを示唆している。これらの報告が示すことから推し量ると、今回の調査では回答記入者である保護者のほとんどが母親であることから、子どもを宿泊保育に送り出すことで母親に何らかの心理的变化がもたらされ、母親自身の子どもに対する見方が変わり、それが結果に反映したのかも知れない。

また、子どもの様子の変化については「自分の気持ちを言葉にして伝えることが多い」、「幼稚園での出来事をよく話す」といった自己表現に関する項目や、「ゴミの分別や資源の節約等、環境に興味がある」といった環境配慮行動に関する項目では変化が認められた。幼稚

園教育要領では、領域「環境」における内容の取り扱い(3)において、自然とのかかわりの中で豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることが示されている。今回の宿泊保育では、幼児の身体的感覚を呼び覚まし、心がわき立つような思いのできるような自然との出会いが多くあったのであろう。集中的な自然体験によって探求心や思考力が働き、それを言葉や行動に表して確認しようとする心の動きが保護者にもよく伝わったことが、「自分の気持ちを言葉にして伝えることが多い」、「幼稚園での出来事をよく話す」、「ゴミの分別や資源の節約等、環境に興味がある」といった項目の得点に反映しているものと思われる。

なお、自然に対する興味・関心に対応する項目に変化が認められなかった理由は天井効果であり、より適切な調査方法を選択していれば異なる結果が得られたかも知れない。また、研究対象であるH幼稚園は、動物飼育や栽培などに力を入れており、日常の園生活の中で自然との豊かなかかわりを可能にする環境が整えられているが、これが高得点に反映されているものと考えられる。

結 論

本研究の目的は、宿泊保育の効果について実践事例と調査結果を基に、幼稚園教育要領における領域「環境」および領域「健康」の観点から考察を加えることにより、効果的な宿泊保育のあり方を考える資料を提示することであった。

宿泊保育について、保護者は子どもの自立心、協調性、自己表現を高める効果を認め、子ども自身の主観においても自立心の高まりを認識していることが明らかとなった。また、宿泊保育を領域「環境」および領域「健康」と関連づけて考察すると、日常の園生活の中で行われる内容との共通点が多く見受けられたが、それゆえに今後は宿泊保育でのみ達成可能な体験の価値を明らかにする必要性が示された。

参考文献

- 伊原久美子, 中野友博, 飯田稔(2008)幼少期の自然体験の効果について; 保護者からみた子どもの変容. 日本野外教育学会第11回大会プログラム・研究発表抄録集, 90.
- 飯田稔, 近藤充夫, 赤井利男(1978)幼児キャンプ参加者の母親の不安に関する研究. 日本体育学会第29回大会 大会号, 170.
- 飯田稔, 近藤充夫, 平野吉直(1979)幼児キャンプ参加者の母親の不安に関する研究; キャンプの効果とキャンプ中の子どもの泣きに関連して. 日本体育学会第30回大会 大会号, 187.
- 文部科学省(2008)幼稚園教育要領解説.
- 幼少年キャンプ研究会(2008)幼少期における自然体験の意義と効果; 花山キャンプ～子どもたちの意欲向上・自立をめざして～報告書.